

## 【予稿集】

# 講談社「人物資料」から専修大学「現代人物アーカイブズ」へ ～その歴史と現状～

植村八潮\*, 小塚昌弘\*\*, 山田健太\*\*\*, 野口武悟\*\*\*\*  
\*専修大学 \*\*読書推進運動協議会 \*\*\*専修大学 \*\*\*\*専修大学  
\*yashio@isc.senshu-u.ac.jp \*\*kozuka@dokusyo.or.jp  
\*\*\*takenori@isc.senshu-u.ac.jp \*\*\*\*yamada.kenta@nifty.com

専修大学「現代人物アーカイブズ」は、講談社資料センターが構築してきた「人物資料」コレクションを、専修大学文学部にジャーナリズム学科が設置されるのを記念して2018年に講談社から移管（寄贈）されたものである。本発表では、「現代人物アーカイブズ」とはどのような資料なのか、その概要や採録方針、活用方法、講談社時代からのコレクション構築の歩み、専修大学に移管後の現状と課題等を報告する。

## From Kodansha's "Jinbutsu Shiryo" to Senshu University's "Gendai Jinbutsu Archives" ～The History and Current State of the Archives～

Yashio UEMURA\*, Masahiro KOZUKA\*\*, Takenori NOGUCHI\*\*\*, Kenta YAMADA\*\*\*\*  
\*Senshu University \*\*Dokusyo Suishin Undo Kyogikai  
\*\*\*Senshu University \*\*\*\*Senshu University

### 1. はじめに

専修大学「現代人物アーカイブズ」は、講談社資料センターが構築してきた「人物資料」コレクションを、専修大学文学部にジャーナリズム学科が設置されるのを記念して2018年に講談社から移管（寄贈）されたものである。雑誌研究の一次資料というと、大宅壮一文庫の雑誌コレクションがメディア企業や研究者の間でよく知られている。一方、講談社の人物資料コレクションは社員や作家ら多くの関係者が活用してきたが、非公開の社内資料ということもあり、これまで、その存在は一般にあまり知られてこなかった。

本発表では、「現代人物アーカイブズ」とはどのような資料なのか、その概要や採録方針、活用方法、さらに講談社時代からのコレクション構築の歩み、専修大学に移管後の教育活用で明らかになった注意点など、現状と課題等を報告する。

また、学外者も申請することで「現代人物アー

カイブズ」を利用できるように準備中である。今後の活用の広がりのために付言する。

### 2. 講談社資料センターにおける「人物資料」の構築

#### 2.1 講談社の雑誌

講談社は、1909年（明治42年）に「大日本雄辯會」として創業した日本の大手総合出版社である。当初は弁論雑誌である『雄辯』や『講談倶楽部』を発行するなど、雑誌を刊行することからスタートしている。なかでも、1924年（大正13年）に創刊した大衆雑誌『キング』は、出版の大衆化を推し進め、日本出版史上初めて発行部数100万部を突破した国民的雑誌となった。

現在、『群像』などの文芸誌、『週刊現代』などの一般誌、『ViVi』などの女性誌、『週刊少年マガジン』などのコミック誌、『げんき』などの幼児誌

など、多分野にわたる35誌の雑誌を刊行している。なかでも週刊誌『週刊現代』（1959年創刊）や総合誌『月刊現代』（1966年-2008年）、写真週刊誌『FRIDAY』（1984年創刊）は、ルポライター、フリージャーナリスト、ノンフィクション作家、報道写真家らの発表の場となっており、ときに「現代ジャーナリズム」と称されるように、新聞メディアに対する「雑誌ジャーナリズム」の世界を構築してきた。

そこで、社員だけではなく、講談社で仕事をする多くのライターや作家らに対して、執筆・取材のための資料を提供するために、1978年に資料センターが発足した。当初は、写真図版資料、リサーチ資料、レファレンスの三つのサービスを提供した。1981年に図書館を統合したことで専門図書館としての機能を有することとなった。このリサーチ資料として独自に収集されたのが人物資料である。

## 2.2 人物資料の概要

人物資料は、新聞 12 紙（一般紙・スポーツ紙・夕刊紙）及び雑誌 25 誌に掲載された人物記事を収集対象とし、すべて現物を切り抜いて、台紙に貼付し、媒体名と年月日を記入して、人物・期間ごとに紙袋に入れて整理・保管したものである。著作権法遵守の観点から、複製は一切行わず、記事は両面にあることから、すべてのメディアは 2 部ずつ購入して処理している。

これらは昭和から平成にかけて、時代を彩った人々の新聞・雑誌記事の集大成であり、長い間、組織内資料として活用されてきただけでなく、広く出版ジャーナリズムを支えてきた貴重な人物資料といえよう。

対象期間は最近の 4 半世紀に限定されているが、田中角栄からアイドルグループ嵐まで、また、著名人のみならず市井の人々も含めて、世の中でニュースになった人物を網羅しており、貴重な現代史資料といえる。しかも、ネットで検索しても出てこない情報が満載であり、人の目と手による作

業がいかにかけがえのないものを雄弁に物語っている。

資料 1 点を貼付する台紙は縦 15 cm×横 21 cm で、台紙をまとめて収納する資料袋はクラフト紙製の封筒で縦 15.7 cm×横 22.5 cm である（図 1）。1999 年、現在の本社ビルが完成したことを機に地下に資料センター専用室（112.0 m<sup>2</sup>）を設け、人物資料 101 連のキャビネットに生存者と物故者に区別して保管されていた（図 2）。

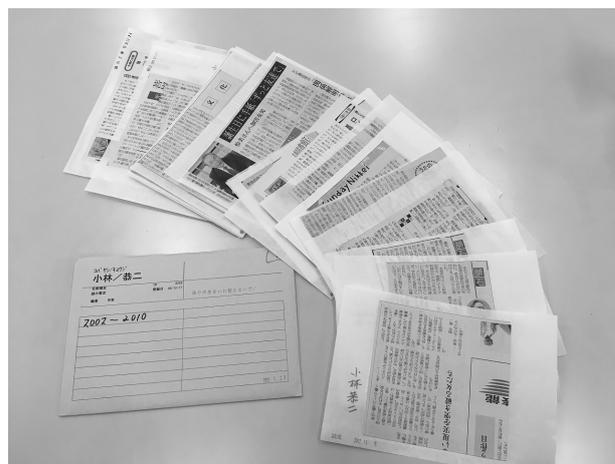


図 1：人物記事の切り抜きと保存袋



図 2：キャビネットと収めた保存袋

1978 年から採取を開始し、2012 年 11 月末で新規の採取は終了したが、2015 年までは死亡情報を追加修正している。人物データは約 76,363 件あり、姓・名の表記で 50 音順に収納されている。

採取対象メディアは、新聞 12 紙が、朝日、読売、日経、毎日、産経、北海道、中日、西日本、京都、スポニチ、日刊ゲンダイ、週刊読書人であ

り、雑誌 25 誌は、週刊現代、週刊ポスト、週刊文春、週刊新潮、週刊朝日、サンデー毎日、プレイボーイ、フライデー、女性自身、女性セブン、ダ・ヴィンチ、ナンバー、文藝春秋、サライ、WHAT'S IN? (ワッツイン)、いきいき、BOSS、日経エンタテイメント、JUNON、Myojo、月刊現代、クーリエ・ジャポン、芸術新潮、日経サイエンス、新潮 45 である。ただし、随時購読・採取を中止した媒体はある。

## 2.3 採取の基準

講談社資料センターにおける採取基準の一部を次に紹介する。

- ① 取材対象者や著者に会いに行くとき事前に調べておくべき情報で、企画を立案するのに、ヒントになりそうな人物データを採取する。ようするに「編集者が必要とするもの」が採用基準である。
- ② すでにリストにある人物で「訃報」は朝日と日経を必ず採取し、他紙からとらない。
- ③ リストにある人物の妻、父、母、子供などは、原則本人の袋に入れる。有名になった場合は、検討の上、新たに別項目とすることもある。
- ④ 死亡している人物は原則、新規に採らない。
- ⑤ 朝日と日経の「人事」は、社長・専務クラス。官僚は、次官・大使クラス以上を原則とする。
- ⑥ 演劇・映画・公演・番組などの紹介・評論は、「書き手」では原則として採取せず、「書かれた人」を採取する。
- ⑦ 書評は「著者名」で必ず採取する。
- ⑧ 「経歴」「読み」「業績」などがはっきりわかるものや、日本一、世界一などの記事は採取する。
- ⑨ 「芸名」「しこ名」を優先し、できれば「本名」を添付する。
- ⑩ 外信ネタ、共同・時事の配信ネタ、インタビューなどはダブリに注意
- ⑪ スポーツ選手の経過記事は原則的に採取せず、記録達成時のみにする。場合に応じて「敗者」も採る。
- ⑫ 犯罪被害者は原則的に採取しない。事件の容疑

者が不詳のときは暫定措置として採り、容疑者が判明した段階で統一する。

なお、吉川英治国民文化振興会が主催し、講談社が後援する文化賞である「吉川英治文化賞」は、昭和42年以来、日本の文化活動に著しく貢献した人物や団体に対して贈呈されている。受賞者の多くは、市井で活躍する人物で、いわゆる社会の「一隅を照らす」人たちである。その候補者となる人物を地方紙の「人欄」などから採取してきた。

## 2.4 活用事例

講談社資料センターにおいて、活用されてきた事例として、著作には表れていない作家本人の興味やプロフィール・共通点などがわかること、古い資料だとデジタル化されていないのでネットで調べても記事が出てこないときに人物名で資料に当たれること、インタビューの事前情報として読み込んでいくことの有効性などが指摘されている。

## 3. 「人物資料」の講談社から専修大学への寄贈

講談社では、「人物資料」の更新を停止し、資料の扱いを検討していたが、貴重な現代史資料であることから、一括して保存し研究に活用してほしいとして、専修大学へ寄贈の申し出があった。そこで専修大学文学部にジャーナリズム学科が設置されるのを記念して 2018 年に講談社から移管（寄贈）された。

専修大学では、「現代人物アーカイブズ」と名付け、図書館施設の中に設置した。10月1日に挙行された記念式典において講談社野間省伸社長が基調講演を行い、「出版の原点は人間への興味である。これを新たな研究活動に利用してほしい」と希望を述べている。

ジャーナリズムは、過去を学び、いまを知り、将来を考えることが大切とされている。そのため第一歩として、資料を集め、読み込み、整理をすることを重要視する。ただしこうした作業は、時に大変な時間と労力を有し、その出来不出来に

よって、見えてくる世界が全くちがってくることも少なくない。

そこで「現代人物アーカイブズ」の研究や教育への利用が期待される場所である。専修大学では、「現代人物アーカイブズ」の研究交流の場とともに教育利用の実践を図ることを意図して、現代人物アーカイブズの運営主体として、同年 10 月 1 日付けで「現代ジャーナリズム研究機構」（所長：藤森研）を開設した。

## 4. 「現代人物アーカイブズ」の課題と今後

### 4.1 資料利用上の注意点

長年にわたる講談社資料センターにおける活用事例や専修大学での教育利用などを通じて、気づいた点や注意すべき点などについて以下まとめておく。

#### 4.1.1 クロスチェックの重要性

人物資料においては本人が書いた文章、本人が話したインタビューなどを一次資料として扱い、他者が本人に取材してまとめた記事、人物紹介や評伝などを二次資料とする。

資料としては当然一次資料が優先されるべきだが、一次資料だからといって常に正確なことが書いてあるとは限らない。例えば自伝には本人に都合の悪いことは意図的に書いてないかもしれないし、固有名詞や年月日などは本人の記憶が誤っている場合もある。必ず複数の資料を突き合わせることで、関係者に問い合わせるなどして確認する必要がある。

インタビューや対談・座談会などであっても、活字にする時点で編集の手が入り、発言の整理や用語・表記の統一などが行われていることがある。

また、他者が取材して書いた二次資料についても比較・検討することが重要である。記事では、取材者・執筆者によって伝えたい要素が違うことから、それを反映して素材の加工の仕方も変わっている可能性がある。

#### 4.1.2 現代における表現や表記への注意

「現代人物アーカイブズ」は 1978 年から採取を開始していることから、古い資料の中には、現在では使用しない方が良いとされる表現・表記が含まれている場合がある。古い資料を引用する場合の注意点といえる。

ただし引用の場合、元原稿の表現・表記を変えることは許されないことから、注意すべき表現を含む箇所を引用する場合は注釈等を付けて、使用する趣旨を説明するなどの工夫が求められる。

#### 4.1.3 扱えない記事など

刑事事件で無罪になった容疑者や、刑罰を済ませた人物に係る記事、裁判で名誉棄損となった記事も含まれていることに注意が必要である。

## 4.2 現状の課題

更新の停止時に生存者として整理された中でも、その後、物故者となった人物が出ている。そこで、すべての人物を生存者と物故者で分けるのではなく、五十音配列に再配置することとし、現在作業中である。また、検索のためのデータベースを準備している。

また、2021 年からは専修大学図書館が「山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム」に加盟した。これを機会に、学外者も申請することで「現代人物アーカイブズ」を利用できるように準備中である。今後の活用の広がりのために付言する。

## 注・文献

- [1] 講談社社史編纂委員会編『クロニック 講談社の 90 年』講談社、2001
- [2] 講談社社史編纂室編『物語 講談社の 100 年』講談社、2010
- [3] 魚住昭『出版と権力：講談社と野間家の一〇〇年』講談社、2021